

## 巻頭言

## 循環により繋がる生命と社会

山崎 光章\*

本年3月11日に発生した東日本大震災に遭遇された被災者および関係者の皆様には心から哀悼の意を表します。さて、私自身大震災の後、社会情勢を鑑みて富山で循環制御医学会を本当に開催してよいのか悩みました。しかしながら、学会員の皆様にはいつも通りに臨床・研究を行い、その成果を本学会にて発表していただくことが、間接的にでも震災に遭われた方々のお役に立つのではないかと思ひ、いくつかの学会中止が決定される中、開催とさせていただきます。

今回も、循環に興味を持つ多くの内科医、麻酔科医、基礎科学者が富山に集まり、日頃の研究成果をもとに大いに意見を交換しました。北風政史先生は、特別講演「循環制御学・分子生物学は心臓病を救えるか」により、今後、私たちの目指す研究の方向性を示してくださいました。臨床現場から問題点を抽出し、その問題点を解決するために、分子生物学などの基礎研究を行う。その結果を臨床へ応用し、新しい作用機序やコンセプトに基づく画期的な新薬、遺伝子治療に基づく医療技術や医療機器の開発などによって、循環器治療の可能性をどんどんと広げることになります。

私は、麻酔科医として常に麻酔と循環は切っても切れない関係にあると思っています。私たちの体は循環を介して中枢神経、呼吸器、腎臓・肝臓、消化管など多くの細胞・臓器と繋がり協調しながら一つの個体として生命活動を続けています。麻酔という行為では、吸入麻酔薬、静脈麻酔薬や循環作動薬などが循環により各々の細胞に運搬され、作用し、その結果麻酔という行為が成立します。今後、複雑怪奇である循環を解析し、緻密な研究に基づく基礎医学とその臨床応用(トランスレーシ

ョナルリサーチ)によって前回の学会で杉町勝会長の予感されたパラダイムシフトが麻酔という分野にも生ずる可能性を強く感じました。

将来、いろいろな分野の人たちが力を合わせることで循環の研究が発展することでしょう。そして、日本発で「世界標準」の循環の関与する低侵襲で効果の高い医療や機器が開発されれば、患者にとって大きな福音となります。同時に、日本の産業が活性化され、雇用が生じ、国際競争力の強化に繋がるでしょう。日本人として、そして世界人の1人として循環制御学的发展に努められれば、リーマンショックの傷が十分に癒えていない経済状況の中、特に大震災で追い打ちをかけられた日本に対して大きな貢献をすることが出来るのではないのでしょうか。それが、結果的に医療の発展に繋がり、世界の人々の幸福に少しでも貢献できればと願っています。

\*富山大学大学院医学薬学研究部麻酔科学講座